





# とあ足の号

## 座談会

### 「小須戸文化」をふり返り 更に今後の進展を期して

前身「小須戸文化」に引続いて昭和二十四年十月第一号のスタートをした「広報こすど」も二十三年の長い長い道程を経てここに第二号を迎えました。

#### 公民館報か 町の広報か

可也 広報第二号を記念して特集をやる。何をしたらよいか、と編集委員会で相談した結果、今までの歩みを振り返り、またあわせて今後どうしたらよいかを考えてみよう。そのためには「広報こすど」の前身である文化協会創立当時以来中心となられた方々にお話をしようという事になり、今晩お集まりいただいたわけでありませう。

○町民の所なきをのせたいということ、役場を頼りにしてきた町づくりにという立場から云のことも載せることになった。それに対する批判の声を載せようということになったが、一つのまにやろ、どつどつがすのまま町の広報の線が細くなってきたように思える。

○そのことで、以前町長さんと争ったこともありました。だれの機関紙でもない、町民の声を伝えることが最もたいせつなことだということも言いつつ、その通りだと思つてやっていたんですが、抵抗もありました。役場の機関紙でないことはわかりませう。

○発行当時、「一万五千人の町民がうしろにひかえていたんだが、町民に判断してもらったらどうですか。」といったこともありました。

○その後次第に印刷が加えられ「祭り行事」を載せたところ「それは結構だ」といって怒られた。

○「小須戸文化」が作られていました。みんなに親しまれるもの、明るい町、子どもにも女性にも読まれるものをと考案した。その印刷担当が魚野さんで、孔版画で名をなすことになりました。

○百人以上の委員で構成されたのは驚きでした。

○金のことも考えず、精力的に行きましたね。

○「前門」のかわりの時で経費が思うように調達できず、映画委員会などをやり金を作りました。

○紙がないときは、田中さんが買って、「これでやれ」といわれたこともありました。

○警察の方から「どこから紙を出した」と言われて不思議がられたことがあった。

○実際、紙の入手は困難でしたからね。

○文化協会がアメリカさんの指導で公民館にすることになりました。

○小須戸は先がけてやっていたが、残念ながら独立部もたなかった。しかし、公民館活動の場は至るところにあるという信念でしたので、施設のことをあまり考えず、紙のことだけを考えた。

○私としては、施設を作ることを指導した。表彰するにしても施設がないというので、全田審査で落とされてしまった。

○私の念願は、博物館を作り、資料を保存することです。古文書でも、

その時小須戸はだだをこねたことがありました。

「小須戸」には文化協会があり、公民館など不用だ。と云ってね。それで私も返答に困ったわけですが、表彰に値するが名称が悪いので、公民館の看板をあげることにした。とたんに表彰を受けることになった。

○景からも他の市町村からも視察するなら小須戸へ行けというように言われ、多くの視察を受けましたね。

○何もないときでした。小須戸はよくやりましたよ。

○公民館を最初に発足させたのは小須戸です。文化協会とか芸術会などという類し物を作ったのも小須戸が最初の草分けでした。

○高層あたりから何かという視線にさらされたものですが、今は賢賢に行き結果になりました。

○小須戸の文庫なら一見できるとは思いますが、残念ながら独立部もたないです。

○広報を出した当時、編集長が矢野さんで、加藤さん、柏さん、小柳さん、なくなられた高橋君、代治さん、久保さん、岡元先生などがおられます。

○五目に編集長を矢野さんの指図でやりましたが、ずいぶん苦労しました。

○新聞の取り取りで、合

わなないこともありました。

書き放題ではだめでして何行つめて書くなどとい

い分言ったりもしました。

○柏さんから風土記を書

いてもらいましたが、重

要な記事でした。あれが

なかつたら、あとは何が

残るかというところ。

○美談や人名を載せる

ことを重視した。

○懸賞を出したりした

こともあった。

○町の施設を考えてや

ることかたいせつ。

○そう、町の展望も大

事だ。

○広報を通して、多くの

習を得て、長期計画を作

るべきでした。

○広報を各地へ

送ること

を考えて

も、編集

費が少な

い。そこ

で広告を

影で費用にあてる。

○ところが、駅から「こ

ろくない」という物差し

でやめることになった。

○かく、葉付けがほしい

です。

○幻燈や紙芝居をもつ

て刑務所まで行ったこと

もあった。とにかく、鉄

金言わずに出かけた。駅

につくと、因人護送車か

連れて来ておき、それに

乗って行ったこともあり

ましたわ(大笑い)

○野外も出しました。

○都大会を引き受け、

中学の二階に陣どり、記

録を速報として出したら

村の関係者に配ったもの

で、大いに好評でした。

○子どもが記録を持ってく

る、すぐに書く、そして

印刷をする。で、得点家

なども記入したり……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……



特集号

広 報 200

広報のもつ意義

町民の声も

町のお知らせが主な  
の、声なき声を載せる  
べきなのか、とにかく金  
をもらい済みのあること  
は事実である。考案方を  
かえれば、町民の金なの  
だから、町民の声を載せ  
るべきだし、町民に奉仕  
すべきだと思ふがどうで  
しょう。

○ 無口と建設的意見と  
ははっきり区別すべきで  
しょうね。

○ いずれにしても両方  
を兼ねるべきでしょうし  
町の方々にお知らせすべ  
きものはお知らせしなけ  
ればならないのですから  
○ 古語下では思想問題  
を出してはいけないこと  
になってはいたが、今でも  
同じでしょうね。

○ 編集の面でも、自然  
に集まるのを待っていて  
もできない。こしをえる  
んだという気持ちがない  
ればならない。そのため  
にも、次号は何を載せる  
かを決めて、取材にあた  
らねばならない。

○ 魅力のある広報をマ  
ットとすべきでしょう。  
○ 期日がまちまちであ  
ってもいけない。  
○ 今後は毎月必ず出す  
ことには決まりましたので  
○ 以前、記事のないと  
き、「大蛇が出た」という  
記事を書いて載せたこと  
がありました。とにかく  
取材に力を入れないと  
まともな記事にならない  
○ 広報も、第三種郵便  
物扱いにしてもらうとよ  
い。郵送料も安くなるで  
しょうから。

○ 広報は、公民館で発  
行し、町が買い上げ、町  
民に無料配布するとい  
うたてをえとるとよ  
い。

○ 世論行政の意味で始  
めた広報ですから、上か  
らのお話し記事だけに留  
らず、世論——建設的意  
見をどう取り上げる  
ようにしたいと思いま  
す。紙上匿名も時にはよ  
い。根拠のないものは避  
けるようにしたいほうが  
いいですね。

○ いろいろない出話  
や今後のことについても  
ご意見ご教示をいただき  
ほんとうにありがとうございます。  
○ 編集者一同大いに奮起  
して広報の発展を期した  
と思います。

座談会を終えて

今後はこうしていきたい

用紙さえも思うように  
入手できなかった草創当  
時の苦闘や編集上の御苦  
心など大当に胸を打ち  
ました。それにくらべ

余りにも思わぬ経過で  
る現在、これよりいのか  
と改めて強く反省させら  
れました。  
○ 今後は次の諸点に重点

をおいて本誌に全市民皆  
さんから愛される広報に  
成長させたいと思ってい  
ます。  
1 毎月必ず定期発行  
いたします。  
2 つとめて官報的な性  
格を避け、皆さんの自由  
な意見を載せたいと思  
います。  
○ 若いも若きもこと  
にも高はれる山吹内容  
を盛り込みたいと思いま  
す。  
○ 皆さんの御意見を  
お願いたします。



第一号より現在の広報紙

館報十五号には

こんな記事が

表彰三たび

我等が公民館

さき全国優良公民館  
候補として推薦された当  
公民館は、文部省の賞状  
において特等賞状を授け  
ないという決定的表彰を  
件の為に遺憾ながら賞状  
となつた。しかし県下の  
優良公民館として今回三  
度目の表彰を受けること  
は本誌に光榮なことで十  
一月三日国民文化の進  
日に館長代理として館副  
長が、緑休白菊会館で  
輝く表彰状に賞状(二  
万円)を受賞した。  
○ 高本町の優良公民館は  
当館の外に直江津、十日  
町の二館であったが、他  
に五原外子館が指定公民  
館としての選考を受けら  
れた。  
○ (昭和二十五年十二月一  
日第十五号に掲載)

広報二〇〇号  
記念に寄せて

中村 信作

多年町民の念願であつ  
た公民館の完全竣工が遂  
成しましたこと、先ずもつ  
ておめでたくお祝い申し  
たいと思つておきます。  
○ 決に多事館長として御  
苦勞いただいた宮崎さん  
の後を継いで、その遺跡  
跡受かた同野さんが館長  
に就任されましたこと  
を祝賀申し上げます。共  
に今後の御活躍を心よりお  
祈りいたします。  
さて町唯一の報済機関  
紙「広報こすど」も発行  
以て二〇〇号に達した記  
念として私の感想を一言  
申し述べます。  
○ 広報こすどの使命は、  
町当局の構想や、議会の  
議決の報告や、町のでき  
ごとなどを掲載されること  
とは勿論ですが、町民の  
だれもが、町への要望と  
か、明るい町吏りの一助  
になることなど、その他  
なんでも気づいたら投稿  
されて、活字にしてみら  
うことは大いに楽しいも  
のです。そこで初めて町  
民に親しまれる「広報こ  
すど」になるのではない

ノート三冊で発足

木村 祐二

終戦になつたがなんに  
も無くなった。それは本  
当に今の若い人々には想  
像もつかない生活であつ  
た。  
○ ノート三冊で文化協会  
の仕事が始まり、ワラ紙  
二枚で広報みたいなのが  
が初めてできた。しかし  
高橋代官の孔版技術  
は目をみはる出来ばいで  
あったことを今でも覚え  
ている。それから毎号の  
紙の心配にもよつと苦労  
した。

二百号ときいて

新潟 加藤 一 郎

「今年入学した女の子  
を二人、よかつたらあな  
たのとこ(タスマン)万  
代)で使つてくれませんか  
か」と定時制の船江高校  
から頼まれたもの、仕  
事と学業を両立させるの  
は大変だし(事実、基伍  
君も多し)また全日制高  
校へ入れなかつたという  
素質の問題にもキモンを  
感じて一カ月余も「マッ  
イン」考えていた。一とこ  
角四年間やり通すという  
ことだけでも定時制の生  
徒はいいですよ」とい

発展を念願して

浅岡 嘉久 吉

「一  
報小  
須戸  
が  
二百  
号を  
迎ふ  
にあ  
つた  
こと  
を  
祝賀  
する  
こと  
は、  
はか  
りし  
れない  
大き  
い  
こと  
であ  
る。そ  
れは  
町の  
発展  
と密  
着し  
てい  
る。政  
治、経  
済、  
教育、  
交通  
運送  
等、あ  
ら  
ゆる  
面に  
わた  
つたの  
長い  
歴史  
の中  
には  
特に  
へん

「広報こすど」が二百  
号になるという。十二で  
割つてみたらなんと十六  
年になった。定時制の四  
倍である。よくもこんな  
歴史な仕事を長いことつ  
づけてきた。たまたまと  
感謝に堪えない。二冊枚  
の広報がそのまゝ小須戸  
町十六年の歴史を語って  
くれている、有難いこと  
である。  
○ 当時を思い出すと、私  
などいつも不真面目で厄  
介者もいとこで、と  
ても二〇〇号の喜びと祝  
賀の言葉に添せていた  
だけ資格はない。因果広  
報である。  
○ そんなグダグダでも二  
〇〇号ときいてちよつと  
シユンとしました。ほんと  
に苦勞しました。あ  
また二〇〇号、四〇〇号  
まで苦勞します。  
○ 「たつた四年間でも、  
かよひ通すことができず  
に、落伍するものも随分  
います。休業者も出て  
来ますが、そのなかから  
やり通した卒業生をみて  
いると、なにか一本自分  
なりにパツパツポイント  
つよになつています。  
ね。  
○ これは、一見めづれ  
たと思えてくる全日制な  
どの卒業生にはみられな  
い願もしますよ。一  
こう語つて下さつた定時  
制の担任先生のことを  
「広報こすど」を担当し  
ていらつしやる人に譲し  
んであげたい。  
○ 全国戦没者追悼式に  
よる八月十五日、正午  
に、後場のチャイムをな  
らします。追悼のため  
め、黙とうをしましよ



